

被服による皮膚障害の調査

成瀬正春* ○内田有紀** 岡村政明**

(*金城学院大 **岐阜大)

【目的】 被服による皮膚障害のうち比較的重症な障害については、家庭用品に係る健康被害病院モニター制度により実情が把握され公開されている。しかし、日常生活においてみられる比較的軽症な障害については潜在化する傾向にあり報告も少ない。本研究の目的は、被服による皮膚障害の実態を明らかにするとともに、男女の相違について検討することにある。

【方法】 調査は、1999年1月に行った。調査方法は、質問紙法を用いた。調査対象は、20歳代の大学生約600名とした。調査内容は、被服着用による皮膚障害の経験の有無、障害発生部位、障害の程度、原因被服の種類、障害発生の季節、皮膚障害に対する対処方法、および体質との関係である。

【結果】 被服着用による皮膚障害の経験は、女子は男子に比較して高率であった。発生部位は、男女とも首が高率であり、次いで男子は手首が多く、女子は耳が多かった。対処方法は、男女とも放置が多く、次いで男子は売薬塗布であり、女子は通院であった。体質との関係では、男女とも食べ物や薬などにより皮膚疾患を起こしやすい者は、被服による皮膚障害も起こしやすい傾向にあった。